

# 1 関市の刃物産業の歴史

奈良

【701】大宝律令の軍制、徴兵制を布き、京都に五衛府、諸国に軍団、衛士、防人を置く。また、造兵司の職制を布き、さまざまな兵器を造る。  
「兵士一人毎に太刀一振、刀子一口を自ら備えしむ」(軍防令)

【751】新たに授刀衛を置く。

平安

【810】大宝の兵制、五衛府を六衛府に改める。また、馬埒殿(うかきどの)を武徳伝と改称。

【867】出雲・伯耆二国の国府以下に皆帯剣させる勅令を出す。

【905】衛府の官人以外に、刀子の刃渡5寸以上のは佩刀を禁止する。

僧侶が帯剣し始める。降魔の剣と称し、刃長3尺5寸に及ぶ。  
⇒僧兵の起源？

【939】平将門の乱、藤原の純友の乱後、直刀から反刀への転換期が訪れる。これより古刀期と呼ばれる。

“直刀”と“反刀”  
奈良時代末～平安時代中期にかけて、それまでの歩兵戦から、馬上で刀を使用するように変化してきました。そのため、抜きやすいよう、刀に独特な反りをつけるようになりました。  
同じ“たち”でも、この平安時代中期以前の直刀を「大刀」、以後の反刀を「太刀」と表記します。

【980頃】律令制の崩壊に伴い、寺領荘園を自衛するため、僧兵が生まれる。

僧兵の台頭  
白河法皇(在位1073～1087)が、「加茂川の水、双六の賽、山法師、是ぞ朕が心に随わぬ者」と述べるほど、僧兵の勢力は強大であり、その組織はさらに寺院連合によって、平家などの武士をも圧倒するほどでした。

大化、大宝の兵制が衰退し、検非違使、追補使が置かれ、地方豪族が私兵を養うようになる。

平安

【1108】僧徒が帯刀するのを禁止する

鎌倉

【1185】源頼朝が鎌倉へ幕府を移す

倉

【1219】征夷大將軍 源実朝が暗殺され、その後、北条家が実質的な政権を握る。

【1222~1226】新長谷寺 吉田観音が建てられる



きつたかんのん  
吉田観音

【1229~1261頃?】関鍛冶の刀祖と呼ばれる元重が、九州または伯耆(鳥取)より、関に移り住んだといわれる。

【1288】奈良より春日大明神を勧請する。(春日神社)



かすがじんじゃ  
春日神社

南北朝

【1338】足利尊氏が征夷大將軍になる

【1340頃?】金重が越前から関へ移り、関鍛冶の発展を導く。

#### 元重と金重

関鍛冶の始祖とよばれる元重ですが、残念ながら現存する刀・押形がなく、その存在は「宝徳系図」など書物でしか確認できず、実在に関しては是非があります。一方、金重は、元重の子という説もありますが、越前から移り住んできた説が一般的で、正宗十哲(相州(神奈川)で正宗の教えを受けた名工)のひとりといわれています。また、貞治二年(1363)紀の押形や、在銘刀が確認されています。



もとしげいけいひ せんじゆいん  
元重慰霊碑(干手院)

関鍛冶の始まりは諸説いろいろありますが、室町時代には既に確立されているものと研究されています。

室町

【1392】足利義満により、南朝と北朝が合一される。

#### 関鍛冶七流

室町初期の美濃国では、相次ぐ抗争で急増する刀剣需要を目指して、手掻包光が一門の手掻派鍛冶とともに、大和から関に移住したほか、幾度の洪水により直江(海津市南濃)の地を見限った直

江鍛冶も、関に移住してきました。  
 その後、戦乱が終息を迎え刀剣需要が減少すると、すでに関で活動していた、千手院派と合流し、生産と販売の内部調整を目的とした、鍛冶仲間の自治機関である“鍛冶座”を結成しました。  
 このとき、主軸になった7つの流派を“関七流”といいます。  
 兼光(手掻包光の三男)の直系の子孫である、善定派を筆頭に、三阿弥派、奈良派、徳永派、得印派、良賢派、室屋派の七流派を指します。  
 また、春日神社を関鍛冶の総氏神とし、鍛冶座の拠点としました。春日神社では、上流階級しか振る舞えない、能が行われていたことから、関鍛冶の隆盛がうかがわれます。  
 鍛冶座の運営は、関七流の各派を代表する頭領で構成される合議制で統率され、“七頭制”と呼んでいます。七頭は、兼吉(善定)、兼則(三阿弥)、兼常(奈良)、兼弘(徳永)、兼安(得印)、兼宗(良賢)、兼在(室屋)で構成されており、この子孫が代々世襲により継いでいます。  
 この頃の関鍛冶の特色は、大和伝の流れを汲んだ、実用本位の作刀が多く、切れ味と剛健さを特徴とした、美濃伝の基礎を築き、関鍛冶の繁栄へとつながりました。

春日神社の能舞台と宝



能舞台



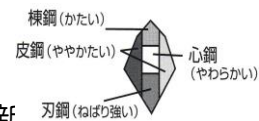
能面



能衣装

【1467】 応仁の乱

関鍛冶の全盛期  
 室町時代中～末期には、300人を超える関鍛冶があり、全国一の数を誇りました。美濃伝と呼ばれた当時の刀は、“四方詰め”という新しい製法を生み出しました。柔らかい芯鉄の四方を、硬い鉄や、靱性のある刃鉄で固めることで、従来より硬さと粘りを併せ持った強い構造になりました。関の刀は、「折れず、曲がらず、よく斬れる」と全国で評判になり、戦国時代の武士に愛用されました。



四方詰め

【1493～1526頃】二代兼定(之定)が活躍する。

【1521～1531頃】二代兼元(孫六)が活躍する。

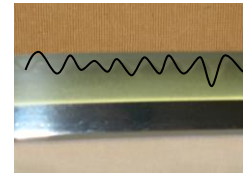
#### 之定と孫六

応仁以降、室町末期までに造られた刀剣を末関と呼びますが、この末関を代表する著名な関鍛冶が、最上大業物とうたわれた、二代兼定と二代兼元です。

二代兼定は和泉守を名乗り、定の字を“之”と銘切りをしていたので、“之定”(のさだ)と呼ばれました。また、切れ味が非常に優れていたため、武田信虎や明智光秀などに愛用されていました。三代兼定も有名ですが、定の字を楷書で銘切りしていたので“疋定”(ひきさだ)と呼ばれました。

二代兼元は孫六と呼ばれ、その独特な三本杉の刃紋と、斬れ味の素晴らしさから、関鍛冶で最も有名な鍛冶です。孫六の由来は定かではありませんが、一説には、六郎左衛門尉兼則の孫弟子にあたることから、孫六と呼ばれたのではないかとされています。

二代兼元にまつわる歴史のエピソードは数多くあります。齊藤道三が娘の濃姫を、織田信長に輿入りさせる際に、孫六兼元を持たせて、「孫六人の顔を早く見せろ」というメッセージを送った話や、桜田門外で、薩摩藩士。有村次左衛門が大老・井伊直弼を孫六にて斬った話、また近年では、三島由紀夫の介錯に使われるなど、孫六兼元は斬れ味だけでなく、日本史の表裏に深く関わっている、歴史的価値の高い名刀です。



三本杉の刃紋



兼元の銘

【1543】明国船にて種子島にやってきたポルトガル人により、島主の時堯が鉄砲を購入。関出身の刀鍛冶、八板金兵衛清定に模造させる。

#### 八板金兵衛清定と国産火縄銃

鉄砲の模造を命じられた清定ですが、筒底を塞ぐネジだけは、どうしても技法がつかめず、焼きしめで塞ぐ方法を用いることで、なんとか国産銃を完成させました。この銃は、天文13年正月の戦いで威力を発揮しましたが、底の焼きしめにより、滓抜きが困難なため、不発や暴発が起こりやすい欠陥がありました。

その後、明国船で島にやってきたポルトガル人の鍛冶から、清定は、筒底は、ネジ切り工具で雌ネジを刻みこむ必要がある等、正

室町

しい鉄砲の工法を学びました。一説には、鉄砲技法の伝授と引き換えに、娘の若狭をポルトガル人に嫁がせたといわれています。こうして、関鍛冶出身・清定の活躍により国産銃が完成し、全国へと広まることで、戦法は、大きな転換期を迎えました。

安土  
桃山

【1573】室町幕府が滅びる

関鍛冶の分散  
戦国大名が領土を支配するようになると、関鍛冶は大名のお抱えの鍛冶となり、全国に散らばって活躍しました。主として、若狭守氏房(兼房)、相模守政常(兼常)は織田信長に、三品派の兼道は武田信玄に、兼法は徳川家康に召し抱えられるなど、関鍛冶は大名たちにとっても重宝がられました。この傾向は江戸時代になるとさらに強まり、以後の刀は、美濃伝の特徴がスタンダードになっていきます。

【1586】豊臣秀吉が農民の反抗を防ぎ、田畑の耕作に従事させるため、刀狩令を出して、刀、弓、槍、鉄砲などの武器をとりあげた。

【1597】関鍛冶 全172名 (関鍛冶惣連名より)

【1600】関ヶ原の戦い

【1603】徳川家康が征夷大将軍になる。

江戸

刀鍛冶の衰退と家庭用刃物への転向  
全国が統一され、世の中が平和になるにつれ、刀剣需要が落ち込みました。特に、寛文(1661~1673)以降は刀剣需要の減少が顕著になり、小刀や剃刀などの家庭用刃物や、鍬や鋤などの農業用刃物の鍛冶屋へ転向する者が増えていきました。

【1750】関鍛冶 全70名

江戸

【1800頃】度重なる飢饉による物価高騰で、鉄や炭が高値になり関鍛冶が困窮。問屋との価格交渉や代官に援助を申し出る。

明治

【1867】明治維新

【1870】武家制度の廃止(武士→士族)、庶民の帯刀禁止。

【1876】廃刀令により、士族の帯刀が禁止される。  
⇒関鍛冶は大きな打撃を受けた。

【1888】関の福地廣右衛門が国産初となるポケットナイフを制作

国産ポケットナイフの祖 福地廣右衛門

明治19年(1886)、関の刃物卸商 佐藤久八は、東京の湯浅七左衛門商店から、外国製ポケットナイフの見本を入手しました。そして、同じく関で刃物卸商を営み、関鉄物商組合(現 岐阜県利器工匠具協同組合)初代総代である福地廣右衛門に、ポケットナイフの製造を委託しました。

福地は、加工法について挟小刀匠の奥田愛吉と中田栄吉の協力を得て、真鍮板や唐木などを使った側板で、国産初のポケットナイフの加工に挑戦しました。当初は失敗を重ねましたが、苦心の甲斐あって、明治21年(1888)に日本刀の制作技術を活用した製品として成功しました。

現在、関のポケットナイフは世界中で愛用され、全国のナイフ出荷額の50%以上を占めています。



福地廣右衛門



国産初のポケットナイフ

戦乱期

【1894】日清戦争

⇒この頃から関の打刃物の輸出が始まる。主な輸出先は朝鮮(当時)

【1904】日露戦争

明治

【1907】善定派の真勢子兼吉が私財を投じて関に「日本刀鍛錬所」を興す。  
⇒弟子に、渡辺兼永、小川兼国、丹羽兼信、藤原兼永。

【1908】遠藤齊治朗が遠藤ナイフ製作所(現 (株)貝印)を関にて操業。

【1910】小川兼国が県庁の後援を受け、春日神社前に「関日本刀鍛錬所」を興す。  
初代所長は兼吉。

大正

【1914】第一次世界大戦が起きる。  
⇒戦争が相次ぎ、刃物の需要が伸び、関の打刃物類が好況に。また、軍需産業の需要が高まるなか、日本刀鍛冶が復興の兆しをみせる。

昭和

【1926】関伝の鍛冶技術保存のため、関町の有力者らが、美濃刀匠擁護会を設立。  
⇒初代会長は後藤治兵衛。

【1932】遠藤齊治朗、小阪利雄により、関安全剃刀製造合資会社(現 フェザー安全剃刀(株))が設立される。  
⇒関で国産カミソリ替刃の生産が始まる。

国産初の剃刀工場と2人のドイツ人  
ドイツ人、フィチタ・ウォルフとヘルマン・クオータは、第一次世界大戦中、青島(当時 中華民国)から捕虜として日本に連れてこられました。  
その後、日本で生活することが許され、剃刀製造のノウハウをもっていた2人は、尼崎に日本初の国産安全剃刀専門工場を作りました。しかし、当時の剃刀は、安価で高性能な輸入品が圧倒的なシェアを占め、短期間で事業は失敗に終わりました。  
そのまま売りに出された工場を買い取り、関に持ち込んだのが、関安全剃刀製造合資会社の始まりでした。  
関の安全剃刀は、国産初の剃刀が原点になっているのです。

【1933】河村兼永がステンレス鋼による日本刀鍛錬に成功する。

【1934】美濃刀匠擁護会が渡辺兼永を立てて日本刀伝習所を開く。  
⇒翌年には春日神社西(現 関鍛冶伝承館)に移し、日本刀鍛錬所と改名する。さらに、1983年には日本刀鍛錬塾に改名。

【1933】岐阜県金属試験場(現 岐阜県工業技術研究所)が関に設立される。

【1941】太平洋戦争(第二次世界大戦)



## 軍需産業としての刃物

昭和初期ころ、アメリカ、イギリスが中国援助政策をとったため、日本製品は世界から締め出され、海外への輸出ができなくなりました。関の主産業である刃物のうち、特に輸出に力をいていたナイフ、洋食器、包丁類などは大きな打撃を受け、軍需品の下請工場へと転換していきました。

戦時下には、関の刃物産業は全て軍事産業になり、再び刀剣産業が盛んになりました。当時、軍事刀は従来の日本刀を区別して昭和刀と呼ばれ、需要が高まるにつれ、粗悪な昭和刀が出回り始め、社会問題になりました。そこで、関の刀剣商は、品質保証をするため、新作の日本刀を全て関刃物工業組合で検査し、合格証の印を打たせました。

この品質保証制度と、鍛錬所による研修制度、ならびに各工程の専門化、分業制の確立による効率性の向上により、関の刀は廉価で優秀だと評判を呼び、全国の約90%シェアを占めるまでになりました。



当時の刀鍛冶

※1944年時の関の刀剣産業

刀鍛冶49人 昭和刀鍛冶200人 研師3,000人

## 【1945】太平洋戦争が終わる(終戦)

## 平和産業としての刃物

終戦後、GHQ(連合軍総司令部)の指令により、刀剣製作が禁止されました。戦時中に刀剣産業に従事していた人々は、生活のため、ポケットナイフや包丁など家庭用刃物の製造へと転換せざるを得なくなりました。

しかし、一旦は禁止された刀剣製作も、日本の貴重な文化財を守る機運の高まりから、昭和25年(1950)に文化財保護法が制定され、刀剣製作復興の基盤となりました。

【1950】市制施行し、関市が誕生。

【1970】日本刀鍛錬技術保存会が結成される。

【1984】関市産業振興センター(現 関鍛冶伝承館)が完成。